看護師が捉える終末期がん患者の「その人らしさ」の概念分析

玉井なおみ，神里みどり

Concept Analysis of “Personality” in Terminal Cancer Patients: A Nurse’s Perspective

TAMAI Naomi, KAMIZATO Midori

名桜大学紀要　第24号
2019 年 3 月　抜　刷

名桜大学紀要，(24)：69-78（2019）

【研究ノート】

看護師が捉える終末期がん患者の「その人らしさ」の概念分析

Concept Analysis of “Personality” in Terminal Cancer Patients: A Nurse’s Perspective

玉井なおみ，神里みどり

要旨

目的：看護師が捉える終末期がん患者の「その人らしさ」の概念を明らかにし，終末期がん患者の看護実践の活用可能性を検討する。

方法：Rodgersの概念分析法を用いた。データ収集には医学中央雑誌Web版を用いて検索用語「その人らしさ」「終末期」「がん」「看護」で全年度検索を行った。さらにハンドサーチの文献を加え，計14件を分析対象とした。

結果：終末期がん患者の「その人らしさ」の概念の属性として［生き方や価値観］［生きがい］［スピリチュアリティ］［自己決定］［これまで通りの日常の希求］の５つのテーマ，先行要件として２つのテーマ，帰結として３つのテーマが抽出された。さらに，影響要素として［終末期の限られた命の時間］などの３つのテーマが抽出された。分析の結果，終末期がん患者の「その人らしさ」とは，「その人の生きがいや価値観，スピリチュアリティが，がんにより命の時間が限られることで揺らぎ苦悩しながらも他者と人生を振り返ることで生きる意味を見出し，自己決定により浮き出された自らが求める生き方の様相」と定義した。

結論：終末期がん患者の「その人らしさ」の定義は，患者理解につながり［その人らしい人生の終焉］を支える看護実践に活用できる可能性がある。

キーワード：終末期がん患者，その人らしさ，看護の捉え方，概念分析

Ⅰ．緒言

2017年10月，がん対策基本法に基づく第３期がん対策推進基本計画が閣議決定された。第３期基本計画では全体目標の一つとして「尊厳を持って安心して暮らせる社会の構築」を掲げており，尊厳を持ってその人らしく生きることのできる社会の実現の方向性が示されている（濱，2018）。多死社会を迎えた我が国において，終末期をその人らしく過ごせる社会がより一層求められる。

一方，終末期がん患者の療養場所の一つである緩和ケア病棟の数は年々増加しており，2017年には394施設（8,054病床）に設置されている（日本ホスピス緩和ケア協会，2017）。しかし，がん患者の死亡場所は（五十嵐ら，2018），緩和ケア病棟12.5％であるのに対し一般病棟は72.4％であり，依然として一般病院で最期の時を過ごすがん患者が多い現状にある。したがって，終末期がん患者が療養の場である緩和ケア病棟のみならず一般病棟にいても終末期がん患者の「その人らしさ」を支える看護が求められている。

射場（2000）は，終末期がん患者は死までの過程に多くの変化や喪失を体験しており存在の危機に直面するとし，最期までその人らしく充実した生を生き抜くためには希望を持ち続けることが重要だと述べている。廣岡ら（2008）は，終末期がん患者は他者とのつながりの中で終末期という困難な状況を安心して，自分らしく生きていけると述べている。終末期がん患者が最期までその人らしく希望をもって生き続けることができるように，看護師は終末期がん患者や家族との関わりを通して支えていくことが重要である。

大伴ら（2010）は，患者や家族の個別的なニーズを汲み取り細やかなケアを積み重ねていくことが心理的な支援につながり，看取り後の家族の辛さを和らげる一助となると述べている。患者が最期までその人らしく生きていくことは，遺族のグリーフケアにも繋がるものと考える。

日本看護協会（2003）は看護の目的について「健康の保持増進，疾病の予防，健康の回復，苦痛の緩和を行い，

生涯を通してその最期まで『その人らしく』生を全うできるように援助を行うこと」としており，看護分野において「その人らしさ」は重要な概念である。しかし,「その人らしさ」は広辞苑や看護学辞典にも記述がなく，明確に規定される定義がない抽象的な概念であるため（小和田美由紀ら，2012：黒田寿美恵ら，2017），個々の看護師により捉え方が異なることが推察される。特に，終末期においては，人生の最期の時をその人らしく過ごすことは重要であり，「その人らしさ」を共通の概念で支援することは重要である。先行研究（小和田美由紀ら，2012：黒田寿美恵ら，2017）において「その人らしさ」の概念分析はあるものの，看護学分野全般や医療者の捉える概念であり，終末期がん患者に焦点をあてた研究は見当たらない。終末期がん患者は，限りある命の時間や終末期ゆえの身体的苦痛や心理社会的苦痛，最期の場所の選択など特徴的なものがあることから，看護師が終末期がん患者の「その人らしさ」をどのように捉えているのか，その概念を明らかにすることは重要だと考える。

そこで本研究は，終末期がん患者の看護に関する文献の中から「その人らしさ」に焦点を当て,「その人らしさ」が記述されている研究論文を検討し，看護師が捉える終末期がん患者の「その人らしさ」の概念を明らかにするものである。先行研究から看護師が捉える終末期がん患者の「その人らしさ」の概念を明らかにし，概念を定義づけることは，終末期がん患者の「その人らしさ」を共通の概念で支援する看護実践の一助になると考える。

Ⅱ．研究目的

本研究は，終末期がん患者の看護に関する文献の中で「その人らしさ」についての記載があるものから，看護師が捉える終末期がん患者の「その人らしさ」の概念を明らかにし，終末期がん患者の看護実践における活用可能性を検討することを目的とする。

Ⅲ．研究方法

本研究では，Rodgersの概念分析法（Rodgers, 2000；黒田裕子ら，2015）を用いた。Rodgersの概念分析は概念が経時的に様々な場でどのように発展してきたかという文脈的な分析であり，看護師が終末期がん患者の「その人らしさ」という概念をどのように捉えて用語を用いているかを明らかにしようとしている本研究に適していると考えた。概念を特定するために,「その人らしさ」に関する記述を分析し概念の構成要素として概念の属性（概念が持つ特性）を特定化し，先行要件（概念に先立つ現象，その現れ方に影響する事象）として抽出し，経時的な状況については帰結（概念の後に生じる事象，結果として起こる事象）を抽出した。最後に，抽出した概念の構成要素から概念の定義を行った。

１．対象文献の選定

文献情報データベースは，国内最大の医学・看護学等の情報データベースである医学中央雑誌Web版（Ver.5）を用いて,検索用語「その人らしさ」「終末期（またはターミナルケア）」「がん（または腫瘍）」「看護」で全年度検索（2018年６月21日検索）を行った。上記検索式で29件が検索され，解説や文献調査を除く研究論文12件から終末期がん患者の「その人らしさ」が記述されている文献９件を抽出した。さらにハンドサーチで５件追加し，計14件を分析対象とした。 なお,「その人らしさ」は日本語特有の表現であり，文化的背景の影響や生活と密接に関係している（小和田美由紀ら，2012：黒田寿美恵ら，2017）ことから，文化的な影響を考慮して国内文献のみを対象とした。さらに「その人らしさ」が研究の目的とされていなくても「その人らしさ」が結果に記述されている論文は採用した。

２．データ分析方法

看護師がとらえる終末期がん患者の「その人らしさ」の概念を検討するため，対象文献の研究目的，研究デザイン,「その人らしさ」に関する結果の記述,「その人らしさ」の概念説明の有無を抽出した。次に，抽出した記述に含まれる意味内容を簡潔に表記し，類似性・相違性を検討しながら段階的にカテゴリを抽出した。抽出されたカテゴリから概念の主要なテーマを導き「その人らしさ」の構成要素とし,先行要件,属性,帰結に分類し,「その人らしさ」の定義を行った。また，分析過程で「その人らしさ」に影響を及ぼす要素が抽出され，影響要素として分類した。なお,分析結果を何度も繰り返し見直し,研究者間で検討を重ねることで真実性の確保に努めた。

Ⅳ．結果

１．対象文献の概要

文献の概要を表１に示す。対象文献14件の出版年は1999年から2017年であり，対象者の内訳は終末期がん患者８件（15例），看護師（看護記録を含む）６件（92例）であり，研究デザインはいずれも質的記述的研究であった。また,「その人らしさ」の概念について説明がなされている文献は２件のみであった。

２．終末期がん患者の「その人らしさ」の構成要素

終末期がん患者の「その人らしさ」について,10のテー

表１．文献の概要

	著者名，出版年	目　的	対　象	方　法	結　果	概念説明
1	清水映里，他（2017）	家族へのエンゼルケアの促しについて	看護師11名	質的記述的デザイン	【その人らしさに寄り添う】のサブカテゴリーとして「その人らしく過ごせるような患者の希望をかなえられるような関り」「最期をその人らしく送り出せるような関り」を抽出	なし
2	坂根加奈子，他（2017）	外来化学療法を受けるがん患者が生活の中で大切にしていることを支える看護プロセスについて	看護師14名	質的記述的デザイン（M -GTA）	【その人らしくあるための生活を整える】をコアカテゴリとし「生活の様子を感じとる」「その人らしくあるための生活を整える」「揺らぐ思いにつきあう」「支援をつなぐ」「看護を振り返る」を抽出	なし
3	生田奈穂，他（2016）	死期が迫った患者の心理面への看護の実際の特徴とそれを支える要因について	緩和ケア認定看護師３名	質的記述的デザイン	【その人らしさを支えるように条件整備】として「患者の価値観で判断できる環境を整える」「その人らしく過ごせるための身体的苦痛の緩和」「心理的苦痛緩和目的の会話」を抽出	なし
4	小浜真利子，他（2014）	患者と看護師の実践報告	終末期中咽頭癌患者１名	質的記述的デザイン（事例研究）	患者のその人らしさには「自分らしさの喪失」「自己効力感の低下」等のスピリチュアルペインがあった	なし
5	畠中祥子，他（2013）	終末期がん患者の思いとその人らしさを大切にした看護の有効性について	終末期胃がん患者１名	質的記述的デザイン（事例研究）	終末期がん患者のその時の思いを大切にし，限られた時間の中で関係性を保ちながら関わったたことは，その人らしさを大切にした看護につながる	なし
6	藤原弘佳，他（2012）	一般病棟における緩和ケアとしての「その人らしさを全うできる患者支援」の実践報告	終末期大腸がん患者１名	質的記述的デザイン（事例研究）	患者の生き方を尊重し，患者の価値観で選択した事柄を支援することが重要。その人らしさを全うできる患者支援には，発達段階の特徴も踏まえた患者理解を基盤に，患者との信頼関係の構築が必要不可欠	なし
7	横濱寿子，他（2011）	生きがい，その人らしい最期と患者・家族と看護師の信頼関係に関する実践報告	終末期肺がん患者１名	質的記述的デザイン（事例研究）	終末期患者に対して，生きがいである喫煙を実施することが，この患者にとってその人らしさを尊重する看護となった	なし
8	三浦浅子，他（2009）	進行がん患者の時期別の心理過程から，その人らしい人生の終焉を迎える援助の在り方について	予後１年前後の進行性膵臓がん患者４名	質的記述的デザイン（事例研究）	その人らしい人生の終焉を迎えられるような援助として，その人らしさを把握したうえで，診断期から死に至る過程に訪れる危機に対して介入を行い，危機体験が成長を持たせるように関わることが重要	なし
9	廣岡佳代，他（2008）	ターミナル期にあるがん患者の自己の支えを振り返る体験とその意味について	緩和ケア病棟に入院中のがん患者５名	質的記述的デザイン（現象学的アプローチ）	患者は，自己の支えの振り返りを通して，困難な状況の中でもより自分らしく在ることを求め，生きようとしていた	なし
10	吉田友子，他（2007）	終末期患者の看護にその人を充実させていた生活体験を取り入れて関わることが，療養生活の質を上げるか検証	その人らしく最期を過ごせたと考える４事例の看護記録	質的記述的デザイン（事例研究）	限られた命をその人らしく最期まで尊厳ある生を全うできるように，その人らしさの形成に大きな影響を与えている事柄の意味を考え，充実して取り組んできたことを尊重し，その時々の状態にあった，その人らしさを発揮できる援助を考えることが必要	あり*
11	和泉成子（2007）	ターミナルケアの中に内在する臨床に即した看護の倫理的価値観について	看護師32名	質的記述的デザイン（現象学的アプローチ）	その人らしさを尊重には，些細な個人的な好みを尊重することや看護師自身の価値観とは合致しない患者の価値観を受け入れること等様々な様相を呈した	なし
12	野戸結花，他（2002）	終末期ケアを行っている臨床看護師の看護観とケア行動，発展過程と影響要因について	看護師22名	質的記述的デザイン	その人らしさを支えるには「日常的な望みをかなえ る」「選択の機会を提供する」「日常生活を支える」ことを抽出	なし
13	山崎祥子（2000）	終末期患者の生を支える看護の効果について	終末期乳がん患者１名	質的記述的デザイン（事例研究）	疼痛緩和，基本的欲求のの充足，自己決定の支援，大切な人との相互作用の重要性を報告	なし
14	上野和美（1999）	終末期がん患者のその人らしさを支える看護の役割の実践報告	終末期卵巣がん患者１名	質的記述的デザイン（事例研究）	疼痛をもつ患者のその人らしさを支える看護の役割として，疼痛緩和，患者の生活感や信条にあった日常生活への援助，医療チームとの協働を報告	あり**

*「その人らしさ」とは社会の中で培われた経験により形成された，その人固有のものの考え方，判断の仕方で自ら意思決定し，表現できている状態
**「その人らしさ」とは可能な限りやりたいことができ，孤独や不安から解放され，生きていることに意義が感じられること（先行研究の引用）

マ，18のカテゴリ，37のサブカテゴリが抽出された。終末期がん患者の「その人らしさ」の概念の構成要素として，２つの先行要件，５つの属性，３つの帰結が抽出された。また，「その人らしさ」の影響要素として３つのテーマと８つのカテゴリ，22のサブカテゴリが抽出された。以下，テーマを［　］，カテゴリを【　】，サブカテゴリを＜ ＞として記述する。

１）終末期がん患者の「その人らしさ」の属性

終末期がん患者の「その人らしさ」の属性として５つのテーマが抽出された（表２）。「その人らしさ」には【これまでを振り返りその意味や価値を見出す】ことは【がんの進行の中でも自分らしくある】ことになり，その人の［生き方や価値観］が保たれていた。［生きがい］として【その人が充実して取り組んできた生きがい】があった。しかし，終末期ゆえの命の時間の限りによる【その人らしさを揺るがすスピリチュアルペイン】がありその人の［スピリチュアリティ］が重要な要素として表面化していた。また，＜選択の機会を得ることで取り戻すそ

の人らしさ>などから［自己決定］をすることは【自己決定で自己の存在価値を認め，取り戻すその人らしさ】につながっていた。また，【今まで通りのその人らしい生活の維持】や【些細なことでもやりたいことの実施】することで［これまで通りの日常の希求］していた。

2）終末期がん患者の「その人らしさ」の先行要件

終末期がん患者の「その人らしさ」の先行要件として［発達段階や生活感・信条］［社会的相互関係］の２つのテーマが抽出された（表２）。【生きてきたプロセスからその人らしさの形成に影響を与えている事柄】として［発達段階や生活感・信条］や，これまでの【他者とのつながりの中で，自分らしさを保つ】といった［社会的相互関係］が「その人らしさ」の形成の基盤となっていた。

3）終末期がん患者の「その人らしさ」の帰結

帰結には，［自分らしさを求め生きる］［他者との関わりから，生きる意味を見出す］［その人らしい人生の終焉］の３つのテーマが抽出された（表２）。

終末期ゆえの危機体験や困難な状況の中，他者との関りや辛い状況に向き合うことで，【危機体験や困難な状況に向き合い，自分らしさを求め生きる】ことや【危機体験からの成長】することは［自分らしさを求め生きる］ことにつながっていた。また，【大切な人との関わりから，生きる意味を見出し，残された日々を生き続ける】など［他者との関わりから，生きる意味を見出す］ことができ，

表２．終末期がん患者の「その人らしさ」の構成要素

	テーマ	カテゴリ	サブカテゴリ
先行要件	発達段階や生活観・信条	生きてきたプロセスからその人らしさの形成に影響を与えている事柄	生きてきたプロセスからその人らしさの形成に影響を与えている事柄（文献10）
			自分らしさを保つ今の自己を成り立たせる基盤（文献９）
		発達段階の特徴	発達段階の特徴（文献６）
		生活感や信条	生活感や信条にあった日常生活（文献14）
	社会的相互関係	他者とのつながりの中で，自分らしさを保つ	その人らしさは重要な存在である他者との関係の振り返りを通して得られるもの（文献５，６，９）
			自分らしさを保つ安心できる存在（文献９）
属性	生き方や価値観	これまでを振り返りその意味や価値を見出す	これまで行ってきた仕事や好きなことの振り返りを通して，その意味や価値を見いだす（文献９）
		がんの進行の中でも自分らしくある	自分らしさの感覚を高め，より自分らしくある（文献９）
			がんの進行による体調の変化と限られた環境の中でも，その時々の状態にあった，その人らしさを発揮する（文献10）
		生き方や価値観	患者の価値観で判断できる環境（文献３，13）
			その人の生き方と価値観（文献６）
	生きがい	その人が充実して取り組んできた生きがい	その人が充実して取り組んできたこと（文献10）
			生きがいである喫煙の実施（文献７）
	スピリチュアリティ	その人らしさを揺るがすスピリチュアルペイン	その人らしさに影響する心理的苦痛（文献３）
			その人らしさに影響する自分らしさの喪失，自己効力感の低下といったスピリチュアルペイン（文献４，５）
	自己決定	自己決定で自己の存在価値を認め，取り戻すその人らしさ	自己決定により自己の存在価値を認め，生を支える（文献13，14）
			選択の機会を得ることで取り戻すその人らしさ（文献12）
	これまで通りの日常を希求	今まで通りのその人らしい生活の維持	今まで通りの私でありたい思い（文献２）
			これまでの日常の希望（文献12，14）
			人目を気にせずいつも通りでいられる（文献２）
			患者や家族目線の生活の継続（文献２）
		些細なことでもやりたいことの実施	一見些細な個人的な好みの実現（文献11）
			趣味や楽しみなど生活の中でやりたいことを表出（文献２）
			やりたいことの実現（文献２）
		その人らしい日常生活の維持と基本的欲求の充足	その人らしさを維持，回復するための日常生活の維持と基本的欲求の充足（文献13）
			個別性のある日常性の維持（文献13）
帰結	自分らしさを求め生きる	危機体験や困難な状況に向き合い，自分らしさを求め生きる	困難な状況でも自分らしさを求め生きる（文献９）
			その時々の患者の思い（文献２，５）
			これからの過ごし方の模索（文献３）
			思い通りにいかないもどかしさとそれでも踏ん張りたい思い（文献２）
		危機体験からの成長	危機体験からの成長（文献８）
			辛い状況に向き合い，自己を肯定的に受け止める（文献９）
	他者との関りから，生きる意味を見出す	大切な人との相互作用から生きる意味を見出し，残された日々を生き続ける	大切な人との相互作用を支援することは，生きる意味を見出すことを援助し，残された日々を生き続ける（文献13）
			限られた時間の中で関係性を保ちながら関わる（文献５）
	その人らしい人生の終焉	その人らしい人生の終焉	診断期から死に至る過程に訪れる危機危機体験が成長することで，その人らしい人生の終焉を迎える（文献８）
		限られた命をその人らしく最期まで尊厳ある生の全う	限られた命をその人らしく最期まで尊厳ある生を全う（文献８）
			その人らしい最期の服装の選択（文献１）

そのことが【限られた命をその人らしく最期まで尊厳ある生の全う】となり［その人らしい人生の終焉］につながっていた。

4）終末期がん患者の「その人らしさ」の影響要素

終末期がん患者の「その人らしさ」の影響要素を表３に示す。終末期がん患者には［終末期の限られた命の時間］といった時間存在や，疼痛などが［身体的苦痛］となり「その人らしさ」に影響を与えていた。特に身体的苦痛は【その人らしさを失う痛みや苦痛】といった重大な影響要素であった。したがって［看護実践］として【発達段階やその人らしさの形成に影響を与える事項からの患者理解】を通して【希望の実現を目指した患者や家族と一歩近づいた関り】を行い，【患者の価値観を受け入れ，生きがいを支える】ことが挙げられた。また，治療やその副作用が「その人らしさ」に影響するため，生活パターンに合わせた内服調整や治療スケジュールの調整といった多職種連携で【やりたいことを実現するための治療の調整】を行っていた。その人らしさを支えることは，その人らしい生を支え【最期をその人らしく送り出す関り】につながっていた。

5）終末期がん患者の「その人らしさ」の定義

終末期がん患者の「その人らしさ」とは，「その人の生きがいや価値観，スピリチュアリティが，がんにより命の時間が限られることで揺らぎ苦悩しながらも他者と人生を振り返ることで生きる意味を見出し，自己決定により浮き出された自らが求める生き方の様相」と定義した。

表３．終末期がん患者の「その人らしさ」の影響要素

テーマ	カテゴリ	サブカテゴリ
終末期の限られた命の時間	限りある命をその人らしく最期まで尊厳ある生を全うできる	終末期の限られた時間の中でその人らしさを大切に関わる（文献５）
		限られた命をその人らしく最期まで尊厳ある生を全うできる（文献10）
身体的苦痛	その人らしさを失う痛みや苦痛	痛みや苦痛の症状はその人らしさを失う（文献12，13）
		その人らしさを支えるために疼痛を含む苦痛の緩和と身体的快適さの維持（文献３，14）
看護実践	患者の生を支えるための苦痛緩和	苦痛を緩和することは，その人らしさを取り戻すことにつながり，生を支える援助として不可欠（文献13）
		その人らしさを支えるための疼痛を含む苦痛緩和（文献３，13，14）
	発達段階やその人らしさの形成に影響を与える事項からの患者理解	その人らしさの形成に大きな影響を与えている事柄の理解（文献10）
		発達段階の特徴も踏まえた患者理解（文献６）
	希望の実現を目指した患者や家族と一歩近づいた関り	その人らしさに寄り添うとは「その人らしく過ごせるような患者の希望をかなえられるような関り」（文献１，３）
		一歩近づく関り（文献２，３）
		家族との信頼関係（文献１，７，８，12）
	患者の価値観を受け入れ，生きがいを支える	終末期がん患者のその時の患者の思いを大切にし，限られた時間の中で関係性を保ち関わる（文献３，５）
		終末期患者の生きがいを支える（文献７）
		その人らしさを尊重することは価値観を受け入れること（文献３，６，11）
		患者のこれまでの生き方を尊重し，患者の価値観で選択した事柄に対して，あらゆる方面から支援する（文献６）
		その人らしさを尊重には，一見些細な個人的な好みを尊重し，患者の価値観を受け入れる等の様々な様相を呈す（文献11）
	やりたいことを実現するための治療の調整	生活に化学療法を取り入れる支援（文献２）
		今までの役割の支障となる副作用への助言やりたいことを実現するための治療スケジュール（文献２）
		生活パターンに照らした内服調整（文献２）
		患者を中心にチームで同じ目標に向かって統一したケアを行う（文献４，14）
	最期をその人らしく送り出す関り	その人らしい終焉のため，診断期から死に至る過程に訪れる危機に対して介入を行い，危機体験が成長を持たせるように関わる（文献８）
		最期をその人らしく送り出せるような関り（文献１，３）

Ⅴ．考察

１．終末期がん患者の「その人らしさ」の概念

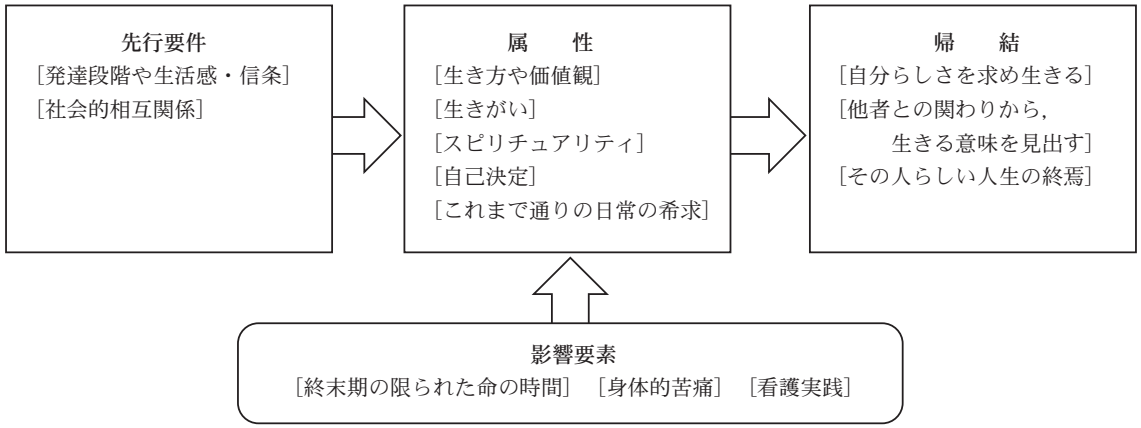
終末期がん患者の「その人らしさ」の概念図を図１に示す。黒田(2017)は看護学分野における「その人らしさ」の概念分析を行い，「内在化された個人の根幹となる性質で，他とは違う個人の独自性をもち終始一貫している個人本来の姿，他者が認識する人物像であり，人間としての尊厳が守られた状態という特性を示す」と定義している。小和田ら（2012）は，その人らしさをその人の歴史の中から現在までのものと，現在の生活の中に医療者が推察するものがあるとしている。本研究では，終末期のがん患者は，限りある命の時間や終末期ゆえの疼痛や倦怠感などの症状や心理社会的苦痛，最期の療養場所の選択など,「その人らしさ」に特徴的な概念があると考え，看護師が捉える終末期がん患者の「その人らしさ」の文献に限定して分析を行った．その結果「その人らしさ」はがんにより命の時間が限られることで，これまでのその人の生きがいや価値観，スピリチュアリティが揺らぎ苦悩しながらも，他者と人生を振り返ることで生きる意味を見出し，自己決定により「その人らしさ」がより鮮明に浮き出された，自らが求める生き方の様相と結論づけられた。終末期ゆえに苦悩が成長につながり自らが求める生き方が鮮明になるという点で黒田（2017）の定義とは異なる,終末期がん患者に特徴的な「その人らしさ」の概念が抽出された。

１）終末期がん患者の「その人らしさ」の属性

終末期がん患者の「その人らしさ」の属性として５つのテーマが抽出された。

横濱ら（2011）は，終末期がん患者の生きがいであった喫煙を実施することがその人らしさを尊重する看護になったと述べており,その人にとっての[生きがい]が「その人らしさ」となっていた。小和田ら（2011）は終末期の看護にその人らしさを取り入れるためには，対象者が大切にしてきた価値観や死生観を捉えることだと述べている。また，日本看護科学学会（2011）は人間について「尊厳ある存在であり，自分自身の価値ある生命を自覚しながら，より良い生き方を目指すという人格的自由をもち，自己を決定する能力をもつ」としており，本研究においても［生き方や価値観］がその人らしさを構成する要素として抽出された。さらに，人間は「自己を決定する能力をもつ」ことから（日本看護科学学会，2011），意思決定を支えることで【自己決定で自己の存在価値を認め，生を支える】ことから［自己決定］は「その人らしさ」の重要な要素と考える。

［スピリチュアリティ］について日本看護科学学会（2011）は「人間の尊厳や存在意義などを表現するものであり，人が，その人にとっての意味や価値，信念をどのように捉え，どう生きるかに関連するもの」と説明している。また人間については「身体的・精神的・社会的・スピリチュアルな側面をもつ存在であり，それらが統合された生活体である」と説明している（日本看護科学学会，2011）。さらに，WHO（武田，訳1993）は,「スピリチュアリティとは，人間として生きるということに関連した経験的側面であり，身体感覚的な現象を超越して得た体験を表す言葉である。…（中略）…生きている意味や目的についての関心や概念と関わっていることが多い」とし，「特に人生の終末に近づいた人にとっては，自らを許すこと，他の人々との和解，価値の確認などと関連していえることが多い」と述べており，終末期にお



［　］はテーマを示す

図１．終末期がん患者の「その人らしさ」の概念図

いて重要な概念であり，本研究においても終末期がん患者の「その人らしさ」の属性として［スピリチュアリティ］が抽出された。小浜ら（2014）や畠中ら（2013）は，終末期がん患者の事例から，終末期がん患者にはスピリチュアルペインがあると述べており，終末期においてはスピリチュアリティが苦悩しスピリチュアルペインとなる。村田（2002）はスピリチュアルペインを時間存在，関係存在，自律存在の３つの視点に分け，その存在を喪失したときに，スピリチュアルペインが起こるとしている。時間存在とは死が近いことにより将来を失い，現在の意味を見失うことであり，関係存在とは，他者との関係を失うことで生じる自己存在の意味を喪失することにある。また，自律存在とは，自律できないことによる自分自身の価値を喪失することである。終末期においてはスピリチュアルペインを緩和することは重要なケアの一つである（田村恵子，2012）。したがって，終末期がん患者のスピリチュアリティは「その人らしさ」の重要な要素であった。

また，日本看護科学学会（2011）は日常生活行動について「人間が成長・発達し，社会活動を営むための行動の総称である」とし，本研究においては［これまで通りの日常の希求］が抽出された。坂根ら（2017）は，がん患者の生活と化学療法の影響を合わせてその人の生活全体として捉えた看護支援が重要であると述べている。終末期がん患者は，終末期ゆえの様々な症状や治療，ADL低下などによるこれまでの日常生活を送ることが難しくなるなかで日常生活が維持・回復するような支援をすることは，「その人らしさ」を支える重要な支援であった。

２）終末期がん患者の「その人らしさ」の先行要件

「その人らしさ」の先行要件として［発達段階や生活感・信条］［社会的相互作用］の２つのテーマが挙げられた。吉田ら（2007）は，その人らしく最期まで尊厳ある生を全うできる支援として，その人らしさの形成に大きな影響を与えている事柄を尊重することの重要性を述べている。また，上野（1999）は終末期がん患者の生活感や信条にあった日常生活への援助がその人らしさの支援に重要であると述べている。終末期がん患者の「その人らしさ」を形づくるものとして［発達段階や生活感・信条］は重要な要素であると考える。

黒田ら（2017）は，人間は，過去から現在，未来へと時間の流れを生きている存在であり，過去の経験がその人をつくり，相互作用の中で生き，それらの体験がその人を形づくっていくと述べている。また，日本看護科学学会（2011）は，人間は受胎から成熟の過程を経て，やがて死を迎える生命体であるとし，連続的な発達段階の過程において，人間と環境は絶えず作用し合いながら変化し続けるとしており，本研究においても［社会的相互作用］が，「その人らしさ」を形づくる先行要件であった。

３）終末期がん患者の「その人らしさ」の帰結と影響要素

終末期がん患者は，死までの過程に多くの変化や喪失を体験し存在の危機に直面する（射場典子，2000）。終末期がん患者の「その人らしさ」には［終末期の限られた命の時間］や［身体的苦痛］など，終末期ゆえの時間存在や身体的苦痛が影響していた。廣岡ら（2008）は，終末期がん患者は自己の支えを振り返る体験を通して，困難な状況の中でもより自分らしくあることを求め生きようとしていると述べており，三浦ら（2009）は危機体験が成長となるような関わりの重要性を述べている。本研究において，終末期がん患者の危機体験から成長できるような関わりは［自分らしさを求め生きる］ことにつながっていた。廣岡ら（2008）は，他者に語ることで語る内容への認識を強め，理解していくと述べている。「その人らしさ」を支える看護実践としては，［他者との関わりから，生きる意味を見出す］ことができるように関わり，【希望の実現を目指した患者や家族と一歩近づいた関り】【患者の価値観を受け入れ，生きがいを支える】ことで［その人らしい人生の終焉］を迎えることができるような支援が求められた。

２．終末期がん看護の実践における概念の活用可能性

「その人らしさ」の概念が抽象的であるために，看護師個々の捉え方が異なることで看護実践に大きく影響しているものと考える。小和田ら（2012）は「その人らしさ」が抽象的であるために，その人らしさを捉える際は医療者の主観が大きく影響すると指摘している。本研究においても，「その人らしさ」の用語の説明や概念定義をしている文献は２件のみであり，多くの文献は，説明のないまま「その人らしさ」を記述していた。本研究では，終末期がん患者の「その人らしさ」を「その人の生きがいや価値観，スピリチュアリティが，がんにより命の時間が限られることで揺らぎ苦悩しながらも他者と人生を振り返ることで生きる意味を見出し，自己決定により浮き出された自らが求める生き方の様相」と定義した。

終末期がん患者の看護実践としては，【患者の生を支えるための苦痛緩和】【発達段階やその人らしさの形成に影響を与える事項からの患者理解】【希望の実現を目指した患者や家族と一歩近づいた関り】【患者の価値観を受け入れ，生きがいを支える】【やりたいことを実現するための治療の調整】【最期をその人らしく送り出す関り】が挙げられた。「その人らしさ」を支える看護としては，まず「その人らしさ」を奪う疼痛などの苦痛の緩和を図り，その人らしさの形成に影響を与える事項から患者を理解したうえで，患者の希望や生きがいの実現

に向けて患者や家族と一歩近づいた関係を築きながら，その人らしい終焉のために関わることが重要であった。小和田(2012)は，その人らしさを看護に取り入れるには，対象者が今まで培った生活全般のこだわりあるスタイルや意思決定，価値観などを捉えることだとしており，本研究においてはさらに苦痛緩和や，希望や生きがいの実現，危機体験が成長を持たせるような関りを行い，その人らしい終焉に向けた看護が抽出されたことが先行研究と異なる点である。また，廣岡ら（2008）は，他者とのつながりの中で自分らしさを高めていくと述べており，本研究においても，終末期がん患者との関わりはその人らしさを支えるのみではなく，相互作用から患者が生きる意味を見出すことにつながっていた。今後，本研究で抽出された概念が，終末期がん患者の「その人らしさ」を支える看護実践に活用可能かをさらに検証する必要がある。

３．終末期がん患者の「その人らしさ」の概念の課題と研究の限界

看護学分野において対象の「その人らしさ」は，重要な概念であり，特に終末期がん患者の看護においては「その人らしい」終焉のためにも重要視されている。そのため，看護実践ならびに研究論文において多用されているが，終末期がん患者の「その人らしさ」の概念を明確にした論文は極めて少ない。本研究においても終末期がん患者で「その人らしさ」をテーマとした論文は少なく，さらに概念を説明している論文は２件のみであり，概念を定義するには十分とはいえない。しかし，論文が限られた中でも終末期がん患者の「その人らしさ」の概念を抽出し定義したことは，終末期がん患者の「その人らしさ」を支える看護実践の一助になるものと考える。今後は，看護師が終末期がん患者の「その人らしさ」をどのようにとらえ，どのような看護実践をしているのかを調査することで本概念の検証を行う必要があると考える。

Ⅵ．結論

１．終末期がん患者の「その人らしさ」の概念の属性として［生き方や価値観］［生きがい］［スピリチュアリティ］［自己決定］［これまで通りの日常の希求］の５つのテーマ，先行要件として［発達段階や生活感・信条］［社会的相互関係］の２つのテーマ，帰結として［自分らしさを求め生きる］［他者との関わりから，生きる意味を見出す］［その人らしい人生の終焉］の３つのテーマが抽出された。

２．看護師が捉える終末期がん患者の「その人らしさ」とは，「その人の生きがいや価値観，スピリチュアリティが，がんにより命の時間が限られることで揺らぎ苦悩しながらも他者と人生を振り返ることで生きる意味を見出し，自己決定により浮き出された自らが求める生き方の様相」と定義された。

３．「その人らしさ」の影響要素として［終末期の限られた命の時間］や［身体的苦痛］［看護実践］の３つのテーマが抽出された。限られた命の時間の中で「その人らしさ」を支援するために症状緩和を行い，［その人らしい人生の終焉］を迎えることができるように【希望の実現を目指した患者や家族と一歩近づいた関り】【患者の価値観を受け入れ，生きがいを支える】などの［看護実践］が求められた。

４．終末期がん患者の「その人らしさ」の概念は，患者理解につながり［その人らしい人生の終焉］を迎えることができる「その人らしさ」を支える看護実践に活用できる可能性がある。

引用文献

射場典子（2000）：ターミナルステージにあるがん患者の希望とそれに関連する要因の分析，日本がん看護学会誌，14（2），66-77.

生田奈穂，畑野相子，簑原文子（2016）：死期が迫った患者の心理面への看護の実際の特徴とそれを支える要因，滋賀医科大学看護学ジャーナル，29-35.

五十嵐尚子，宮下光令（2018）：データでみる日本の緩和ケアの現状，ホスピス緩和ケア白書2018，98-135. 青海社.

藤原弘佳，嶋田純子，森佳代，他（2012）：その人らしさを全うできる患者支援，三菱神戸病院誌，2, 57-60.

濱卓至(2018)：国の動向と担当者として考えていたこと，ホスピス緩和ケア白書2018，6-9. 青海社.

畠中祥子（2013）：終末期がん患者に対して村田理論を用いてその時の患者の思いとその人らしさを大切にした看護，奈良県立三室病院看護学雑誌，29，48-51.

廣岡佳代，小松浩子（2008）：ターミナル期にあるがん患者の自己の支えを振り返る体験，日本がん看護学会誌，22（1），3-11.

小浜真利子，谷本栄子（2014）：中咽頭癌終末期のスピリチュアルペインを抱えるA氏への関り，公立八鹿病院誌，23，25-28.

黒田寿美恵，船橋眞子，中垣和子（2017）：看護分野における「その人らしさ」の概念分析，日本看護研究学会雑誌，40（2），141-150.

三浦浅子，大西和子（2009）：進行性膵がん患者の死の受容過程の分析，三重看護学誌，11，53-64.

村田久行（2002）：スピリチュアルペインの構造とケアの指針　臨床に生かす

スピリチュアルケアの実際３．ターミナルケア．12(6)，524-525，三輪書店
日本看護科学学会看護学学術用語検討委員会第９・10期委員会（2011）．看護学を構成する重要な用語集．日本看護学学会ホームページ．http://jans.umin.ac.jp/iinkai/yougo/pdf/terms.pdf．（検索日2018年10月19日）
日本看護協会（2003）：看護者の倫理綱領，日本看護協会ホームページ．http://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/rinri/code_of_ethics.pdf（検索日：2018年10月９日）
日本ホスピス緩和ケア協会（2017）：緩和ケア病棟入院料届出受理施設・病床数の年度推移，http://www.hpcj.org/what/pcu_sii.html（2018年４月28日閲覧）
野戸結花，三上れつ，小松万喜子（2002）：終末期ケアにおける臨床看護師の看護観とケア行動に関する研究，日本がん看護学会誌，16（1），28-38.
大伴みらい，福田知美，西原美由紀，他（2010）：緩和ケア病棟入院時から看取り後までの家族の心情と，求められるケアの明確化，大津市民病院雑誌，11，62-66.
小和田美由紀，川田智美，藤本桂子，他（2012）：医療者がとらえる「その人らしさ」に関する研究内容の分析，群馬保健紀要，32，43-50.
Rodgers BL，Knafl KA（2000）：Concept Development in Nursing Foundation，Techniques，and Applications（2nd ed），77-102，Saunders，Philadelphia.
坂根可奈子，長田京子，福間美紀（2017）：外来化学療法を受けるがん患者が生活の中で大切にしていることを支える看護プロセス，日本がん看護学会誌，191-199.
清水映里，西山恵美子，土田敬子，他（2017）：がん終末期患者におけるエンゼルケアの家族参加に対する看護師の思いの実態，日本看護学会論文集　慢性期，27-30.
嶋田純子，森佳代，高山京子（2012）：その人らしさを全うできる患者支援　Rowlandによる５つのストレス領域を用いての検証，三菱神戸病院誌，2，57-60.
田村恵子，他編（2012）：スピリチュアルペインのアセスメントとケア計画の立て方　看護に活かすスピリチュアルケアの手引き．青海社.
上野和美（1999）：痛みを持つ患者のその人らしさを支える看護，神奈川県立看護教育大学校事例研究集録，22，10-14.
和泉成子（2007）：ターミナルケアにおける看護師の倫理的関心，日本看護科学学会誌，27（4），72-80.
World Health Organization（1990），武田文和　訳（1993）：がんの痛みからの解放とパリアティブ・ケア，金原出版.
山崎祥子（2000）：終末期における患者の生を支える援助に関する一考察，神奈川県立看護教育大学校事例研究集録，23，91-95.
横濱寿子，吉村裕子，武田紗代子，他（2011）：終末期患者への生きがいに沿った介入を実施して，岩見沢市立総合病院誌，37（1），41-43.
吉田友子，絵森めぐみ，増田悠佑，他（2007）：その人らしさを尊重した終末期看護，日本看護学会論文集成人看護Ⅱ，38，65-67.

Concept Analysis of “Personality” in Terminal Cancer Patients: A Nurse’s Perspective

TAMAI Naomi, KAMIZATO Midori

Abstract

OBJECTIVE: The objective of this study was to identify the concept of “personality” in terminal cancer patients from a nurse’s perspective, and to examine possible practical nursing applications when caring for terminal cancer patients.

METHOD: A concept analysis was performed using the Rodgers method. Data was collected from database Ichushi Web with keywords: “personality”, “terminal”, “cancer” and “nursing”. A total of 14 articles were analyzed, including articles identified by a hand-search.

RESULTS: As the attributes of the concept of “personality” of terminal cancer patients, five themes (e.g., [life style and values], [reason for living], [spirituality], [self-determination], [daily desires continuing as normal], two themes as prerequisites, and three themes as conclusions were extracted. In addition, three themes such as “limited lifespan and end of life” were extracted as the effect factor. The results of the analysis revealed that the “personality” of terminal cancer patients is defined as “finding the significance of life, values, and spirituality of the person by looking back on life with others while experiencing distress at limited lifespan due to cancer and visible aspect of way of life by self-determination”.

CONCLUSION: The definition of “personality” in terminal cancer patients leads to patient understanding, and there is a possibility that it can be used for nursing practice that supports [personalized end of life care].

Keywords: terminal cancer patients, personality, nurse’s perspective, concept analysis